

第十五章 崩壊

1

その夜は結局、五十嵐との面会は叶わなかった。催眠ガスが効き過ぎて目覚めなかったのだ。萌黄たちはあきらめるしかなかった。齋藤老人は「なんじゃつまらん」とさんざん不平を並べた。

翌朝になって野宮助教授から詳しい説明がなされた。

大将はやはりリアルだった。ただ、いつしよにいた信太という男はヴァーチャルで、こんこんと眠る大将の代わりに腰の軽そうな信太を尋問したところ、すぐに観念して、洗いざらいしゃべったという。

それによると、五十嵐は大学が見えるや、その物々しい警備に、てっきりこれはリアルたちが囚われてしまったものと錯覚したらしい。

『救い出さねばならぬ。これは “聖戦” だ!』

五十嵐はそう言ったという。

信太は、東京からバスに乗せて連れてきた仲間（五十嵐に心酔している者たち）に門の外で騒ぎを起こさせ、その隙に空から侵入する作戦を立てた。

作戦は見事、図に当たり、ふたりは潜入に成功した。

もつとも信太がNASA製バルーンと自慢していた降下用ポッド（着陸船）は、NASA製でも何でもなく、安普請のまがい物だった。

「迷彩服たちも、命知らずなと呆れとったよ」

当初疑われていた『長野防衛隊』との関係はまったくなかったようだ。騒いでいた者たちの攻撃は幼稚きわまりなく、十数人が捕縛され、他は散り散りに逃げ去った。五十嵐と信太も捕われた。

野宮はホワイトボードに、五十嵐寛壽郎いがらしかんじゅうろうの名前を書き加えた。

「亡くなったリアル四名を除くと、五十嵐を含めて、集まったりアルの人数は七名。まったく出来過ぎだ。なんと効率的な！」

「あと一名ですか……」

萌黄が感慨深げに言うと、

「そうだ。この調子だと、残るひとりは今日か明日にでも来てくれるかもな。いやもうすぐそばまで来てる可能性もある。中の様子をうかがっていたりして」

野宮は窓外を眺めた。あいにくの雨空である。

いつもの応接室には、全リアルが集合していた。

「あとひとりが、もし来えへんかったら、どないなるんかいな？」

ビッグジョーク齋藤が妙な笑みを浮かべつつ訊ねる。

「北海道レベルの超爆発が、この国のどこかで起きます。それが関東を消すのか、四国を消すのか、はたまたこの近畿地方を吹き飛ばして大きな海峡を作るのか」

最後のひとりは、SS広告を目にしなかったのかもしれない。それとも京都まで来たくても来れないような場所にいるのだろうか。

萌黄は考えた。もし自分が離島にいたとして、船の都合がつかなかったら……。

自らの命を絶つ勇氣があるだろうか。いや死ぬことを自覚していれば死ねない可能性もある。

萌黄は想像を巡らせながら、ひとり煩悶した。

「あつ、来た来た！」

野宮が窓ガラスに顔を押しつけた。

「最後のリアルですか？」

柊が訊ねると、

「いや違う。転送装置に足りなかった部品だよ。時間どおりに到着だ。さすが副社長だな」

なるほど、ヘリの音が近づいてきた。

「さて、私はこれから最後の仕上げを取り仕切らねばならない。皆さんには夕方にお会いしましょう。明日のお別れに際し、ささやかな宴うたげの席を設けますので」

萌黄はようやく久保田に会えた。

「むんさんは肺炎を起こしかけたけど、どうにか持ち直したよ」

萌黄はそんなことは少しも知らず、驚いた。

「もうすっかり大丈夫なん？」

「ああ、医者は起き上がったても問題ないと太鼓判を押した。体力はまだまだだけどな」

噴水に近い四阿あずまやである。

噴き上がる水の向こうでは、巨大なヘリが鼻面をこちらに向けている。待望の部品がいま降ろされ、これから電力施設に運ばれるところなのだ。

「今夜のお別れの会には出席できるだろう」

「……………」

いよいよむんとさよならする時が来たのだ。自分は元の世界に帰れば、リアルむんが待ってくれているはず。でもヴァーチャルむんの前から自分は永遠に消えてしまふ。

「向こうの俺によろしく……つつても、君のことなんて全然知らないんだな」

言われて、萌黄はなぜか息が詰まった。

顔色を隠すように横を向くと、和久井助手が萌黄を睨むような目をして通り過ぎていった。

午後遅く、五十嵐の意識が戻ったと連絡が入り、萌黄、柊、清香、齋藤、炎の五人が面会に出向いた。

五十嵐は軍服の代わりに囚人服のような灰色のお仕着せを身にまといていた。

彼が幽閉されているのは、病室ではなく牢屋だった。そんなものが大学構内に作られていたことに萌黄は驚いたが、両者の会見は鉄格子をはさんでおこなわれることになった。

五十嵐は自分たちの行動が、まったくの誤解から生じたことを知って、がっくりとうなだれた。萌黄たちは、彼が同じリアルであることを、できるだけ平易な言葉を選んで説明したが、どこまで耳に入ったかは疑問だった。面会を終えようとした時、最後の質問を発したのは、意外にも五十嵐のほうだった。

彼は柊の姿をしげしげと見ながら、

「あんた、若そうだが、もしかしてお坊さんかな？」

「そうですか」

「ならば訊ねたい」五十嵐は立ち上がり、鉄格子に近づいた。「私の身体にはときどき妙なモノが降りてくる。

信太は狐が憑くんたと言う。そうなる私の身体は誰か別のものになってしまふのだ。やりたくもないのに人を斬ってしまうのだ。——教えてくれ、私はいったいどうすればいい？」

柊は席を立つと、鉄格子を両手でつかんだ。

「あなたの身体が、ご自分の意思に背いて動いてしまったと、こうおっしゃるのですか？」

五十嵐はうつむいたまま頷いたが、途中で激しく横に振った。

「そうとは言い切れないのです。なぜなら斬った人間はどれも『斬り捨ててしまえ』と心の中で思った人間ばかりなんですから……」

「しかし、あなたにはそこまでするつもりはなかった」

「——信じてはもらえないでしょうが、人の命を奪おうなど本気で考えたことは一度も……いえ、一度だけありました」

「それはいつですか？」

「——東京の山手線に乗っていた時です。あの日、私は孫の仇を探していました。孫は先日、ある駅でごろつきどもに半死半生の目に遭わされました。今もまだ入院しとります。私は犯人たちをこの手で成敗してやろうと決心しました。サーベルは祖父の遺品の中から持ち出してきたものです。ですが誓ってもいい。殺意を持ったのは、その時だけです！」

五十嵐は一気に吐露すると、苦しそうに咳き込んだ。萌黄には、彼の目は一点の曇りもないように見えた。嘘を並べて罪を逃れようとしているようにはとても思えなかった。

「ご老体、まずは落ち着いてください」

「これは不覚。取り乱してしまつて申し訳ない」

その時、齋藤がスツと前に出た。

「五十嵐さんとやら。わしは齋藤という老人や。ひとつ聞かせたつてくれ。アンタ、何かココに病氣をお持ちやあらへんか？」

齋藤の指先が叩いたのは、自分の側頭部だった。

五十嵐は呆然と齋藤を見た。

「なぜ、それをご存知で？」

「病院で言われたことがあるんですな？」

「その……息子に連れられて精密検査を受けに行きましたら……大脳の一部が萎縮していると……」

「さよか。そうやないかと思たわ」

「ご老体。五十嵐さんは脳の病氣で？」と柊。

「おそろくな」

齋藤は確信のある頷きかたをした。

「すると……人を斬るのは止まらないんですな」

五十嵐は頭を抱えた。

誰もかける言葉が思い浮かばなかった。萌黄もただ哀

れみの視線を送ることしかできなかった。

『お別れの会』は日暮れとともに始まった。

本館の大会議室に集まったのは、萌黄、清香、炎、柊、齋藤、ハジメ、伊里江のリアルたち。そして萌黄の父とそのスタッフ数人。徹夜で突貫工事をおこなう現場から抜け出してきた責任者数名。さらには伊椎製作所の副社長とその取り巻き。

萌黄が待ちわびていたむんは車椅子に乗って登場した。後ろから久保田が押し、和久井助手が介添えする形で、奥の扉からゆつくりと入ってきた。

司会の野宮は満を持して挨拶に立った。

「最後の部品が到着し、転送装置がいよいよ完成する運びとなりました。これにより、リアルの皆さんは自分たちの本当の故郷に帰ることができます。我々も世界を滅亡から救うことができます。そう、我々はテロリストの陰謀に打ち勝ったのです！」

拍手が起こった。

「さて今宵、ささやかな宴席を設けましたのは、我々の勝利宣言とともに、リアルの皆さんに窮屈な思いをさせたことに対する罪滅ぼしの意味も兼ねております。簡単な立食パーティーで申し訳ありませんが、しばしご歓談いただければと思います。なお、肉はすべて合成でござ

います」

あちこちで苦笑が起きた。そして野宮が頭を下げたのを合図に、それぞれグラスに手を伸ばした。

「日本の未来にカンパ〜イ！」

あらためて拍手が巻き起こる。

萌黄は人のあいだを縫って、むんの元に走った。

「もえぎーっ」

「むーんっ」

萌黄は飛びつくように抱きついた。

むんの身体はわずか三日で驚くほど痩せていた。

会いたかった——。そう言いたかったのに、感極まつ言葉が出ない。むんも思いは同じのようで、ただただ手を握り合うばかりだった。

でもこんな時、口火を切ってくれるのはいつもむんだ。

「明日でさよならやね」

「……ごめんな」

萌黄は目を伏せる。

「謝ることないよ。萌黄の住む世界は向こうなんやから。これからPAIを更新してもらわれへんのがすごく残念やけど」

「それだけえ？」

「アハハ、向こうにいるわたしによろしくね」

ふたりともしゃべっているそばから、涙が滝のように

溢れて止まらない。

萌黄はもう一度むんを抱きしめた。彼女の体温を記憶に刻み込もうとするかのように。

3

二度と笑い合えない気がしていたのに――。

こうして三日ぶりの再会を喜び合えた。萌黄はうれしさに、むんの手を握り続けていた。

伊里江はエネ研スタッフをつかまえて、何ごとか熱心に議論している。

ビッグジョーク齋藤は別のスタッフに「ギリギリまで帰る日を遅らせてもらえないか」と訴えているらしい。スタッフが首を横に振ると、気落ちしたような顔で、隅でポテトチップをつまんでいるハジメのほうに戻っていった。

飲食に付き合えない炎少年は、それでも野宮らの輪に混じって、あれこれと質問を浴びせていた。今日の昼、彼は母親にリアルな事情を語って聞かせた。母親は理解するより前に、息子が自分の前からいなくなるという一点にショックを受け、また寝込んでしまったという。炎ももしかしたら期限いっぱいまでこの世界に残ることを希望しているのかもしれない。

（できればそうしたい）

萌黄はむんの肩に手を置きながら心の中でつぶやいていた。しかしそんな情の絡んだ悠長なことなど許されそうにない。今でこそリアルとヴァーチャルが楽しげに語り合っているものの、実際は早く消えてほしいのだ。一刻も早く不安を取り除きたいのだ。

小耳にはさんだところでは、アメリカからは矢のような督促が日々舞い込んでいるという。これで転送装置が稼働しなければ、本当に核兵器を打ち込みかねない鼻息らしい。

「萌黄、ちよつといいかな」

父親が声をかけた。むんは気を利かせてドリンクを取りに行った。

「できればいいんだが、向こうに戻ったら、一度私を訪ねてくれないか。もちろん母さんが落ち着いてからでいい。お前が消えて、ひどく心配しているだろうしな」

萌黄は父親に抱きついた。

「きつと会いにいくから」

大会議室のある、本館の外。

雨は夕方から勢いを増している。

壁にもたれて、最前からひとりでビールを飲んでいるのは雛田義史だった。

《フュウ~~~~ン》

携帯が鳴った。いや泣いた。雛田が舌打ちしながら取り出し、

「誰もいやしないよ。カワイコぶるのはよせ」

液晶画面にひよつこりとピンクのカバが現れた。

《おやおや、威勢がいいね。落ち込んでるかと思ったのに、意外と元気そうじゃないか》

PAIであるカバは、元相棒・影松豊の声でペラペラとしゃべった。

「からかうな。僕はいま人生最大の悩みに、心が張り裂けそうなんだ」

《明日、永遠の別れを前にして、清香に親子の名乗りを上げるべきかどうか――》

「ウルサイ」

《“お前の本当の父さんはカゲじゃなく、俺なんだ！

頼むから最後にお父さんと呼んでくれー”》

「ウルサイつつってんだろ！」

雛田は携帯を芝生の上に放り投げた。

《おおい、この携帯は防水性だが、いくらなんでもあんまりだ。動物虐待で訴えるぞー》

雛田は膝を抱えて座り込んだ。

雨の向こうにいくつもの電灯の光が見える。これから徹夜作業で転送装置の電源を完成させようとしているの

だ。

「いつそ、あそこを壊しちまうかな……」

《物騒なことを言うじゃないか。娘の幸せを考えてないのか？》

「ウルサイ、ウルサイ」

雛田は膝の間で頭を振った。

背後の窓からは、ガラス越しに歓談する声が聞こえてくる。耳は自然と清香の声を探るが、よく聴き取れない。「——いきなり京都に呼び出されて、リアルだとか、別の世界だとか、雲をつかむような話をされて……。なんだか騙されてるような気がしてならないよ」

ふと持ち上げた足の下で、一匹のアリが潰れていた。知らずに踏んづけたようだが、死骸はアツという間に砂へと変貌した。靴先で触るとアリの形は簡単に崩れ、地面と見分けがなくなかった。

「生きとし生けるもの皆、死ねば土に帰る——か。ハハハ、こりゃいいや。葬儀屋は廃業だな」

《笑ってごまかすな。時間は残り少ないんだぜ。ぐずぐずしてると——》

「判ってるよ。判ってるけどよ……」

言いかけた時、けたたましいローター音が頭上を通り過ぎていった。ヘリコプターが着陸態勢に入っただ。貨物運搬用ではなく、リアルキラーズ専用機だ。

「雛田よ」カバが大きな口を開いた。「後悔するぞ。い
ま言っておかないと」

「しかし……本当に告白すべきは、この僕じゃなく、向
こうの世界の僕じゃないのか！」

《おんなじだろが》

「全然違う！ それに出生の秘密をカゲが明かしたのは、
彼が死のうとしていたからだ。向こうでは生きているは
ず。そうなる状況は異なる。彼女は、自分がカゲの子
であると信じていたほうが幸せなんじゃないか」

《影松はな……いずれ教えるつもりだったんだよ》

カバは姿に似合わないしんみりとした声で言った。

「だ、だろう？ だったら今僕が教える必要は——」

「おじさま!？」

入口から清香の呼ぶ声がした。雛田はハツとして口を
つぐんだ。

「そこにいるの、おじさまでしょ？ どうして中に入ら
ないの？」

清香は雨を避けて、壁づたいに近づいてきた。

《チャンスだぞ》

カバが小さな声で言った。

雛田はどぎまぎしながら、あわてて立ち上がる。

「姿が見えないので探したわよ。……あれっ、カバ松が
雨に打たれてる」

「水浴びしたがったんだよ」

「そんな！ アハハハ」

清香は濡れた携帯を拾い上げると、自分のハンカチで丁寧に拭い、雛田の手に返した。

《フユウ~~~~ン》

カバが鳴いた。早く言えと促しているのだ。

雛田はツバを飲み込んだ。背中を雨のように汗がっただ。初舞台を踏んだ時以上の緊張感が彼を襲った。

「ほら、カバ松も雨はイヤだって言ってる。さあ部屋に入りましょ」

清香は雛田の手を取って歩き出した。雛田は清香の髪を見ながら、魚のように口をパクパクさせた。

「ゆっくりお話できるのも今晚だけなんだから」

清香の言葉に雛田は涙が込み上げてきた。

ふたりは入口のひさしの下に入った。

「なあ、き、清香ちゃん」

「え？」

雛田の心臓はハードロックのバスドラのように彼の胸をドンドン震わせた。

（言うぞ言うぞ言わなきゃ言うぞ言うんだ言え言え言え言えいいんだ言え言え言え）

「何を言うの？」

雛田はあわてて口を手で塞いだ。カバ松がアチャ〜ツ

と鳴いた。

そこに、水を跳ね上げながら迷彩服たちが駆け込んできた。

「どけどけ、どかんか！」

迷彩服の手が雛田を突き倒した。

「何するの!？」

清香の声にも耳を貸さず、迷彩服たちは泥のついた靴のまま、大会議室の扉を開けた。

「バカモノどもめ、浮かれてる場合か！」

真崎だった。左目を縦に走る裂傷には、血がこびりついていた。

4

「だしぬけに何だね、真崎ク——」

「黙れ！」

真崎は一喝した。

「我々は命を張って使命を果たしているというのに、白衣の皆さんは、クーラーの効いた部屋で、酒を飲みながらパーティーですか。結構なご身分ですな」

部屋は水を打ったように静まり返った。萌黄はむんの手を強く握った。

「まったくアンタらは、守りがいいのある人たちだぜ」

久保田が真崎の前に立った。

「何があつた？」

真崎は被っていた迷彩模様のキャップを脱ぐと、テールに力まかせに叩きつけた。

「やられたよ」

「？」

「奴は——伊里江真佐吉は確かに大津にいた。俺たちは奴のアジトを急襲することに成功した。……しかしそれがトラップだったとはな」

「トラップ——罠^{わな}？」

ざわめきが起きた。

真崎は空いている椅子にドスンと腰かけ、

「そうだ。我々の動きは完全に読まれていた。アジトに突入するや——ドカンだ」

真崎は両腕を開いてみせた。

「おかげで部隊二十名のうち、半数が即死、六名が重軽傷で一時間以内に砂になった」

萌黄の肌は粟立った。

（もし、わたしが行ってたら——）

「取り逃がしたんだな？」

久保田は容赦なく詰め寄る。

「ああそうだ。偉そうな口を叩いておきながら、俺までこなでいたらくとはな」

「その顔の血は――」

「返り血だ。仲間のな」

和久井助手が悲鳴を上げて倒れた。野宮と久保田が駆け寄った。

「真佐吉の奴は不敵にも伝言を残していった。聞かせてやろう」

そう言うと、ポケットからくしゃくしゃになった紙切れを取り出し、朗々と読み上げた。

「『リアルたちを集めてくれてありがとう。私のほうからお迎えにあがるとしよう』」

ざわめきが、どよめきに変わった。

「迎えに来る？」

「真佐吉が京都に来るのか？」

「この大学に向かつてるんだ！」

「そんな、たったひとりで何ができる！」

「リアルキラーズを手玉に取ったんだ。甘く見るな」

「早急に警備体制を見直すべきだ！」

「それより、一刻も早くリアルを送り返すのが先だ！」

あらゆる声が錯綜し、部屋は混乱に陥った。

真崎が腰の銃を抜き、天井を撃った。部屋はまた静かになった。

「――第一級の警戒態勢を敷く。以後、私の命令に従っていただく」

真崎は鋭い目で居並ぶ顔を見渡すと、床に唾を吐き捨て、大会議室を後にした。

部屋は再びざわめき出した。

リアルたちが集まってきた。柊は扉を見つめながら、「あれが噂に聞いていた真崎という男ですか。見るからに“戦士”ですね。彼らがやられたとなると油断はできません」

ビッグジョーク齋藤がハーツとため息をついた。

「わしも真佐吉とかいう、ワケの判らんモンには捕まりとうないからな」

リアルたちは一通りの状況説明を受けている。それでも「ワケの判らない」というのは正直な感想だろう。

『そんなに怖がらなくても、いいんじゃない？』

炎が言った。全員が彼のサングラスを見た。

『だって、僕たちにはリアルパワーがあるんだから。ねえ、萌黄姉さん』

名指しされた萌黄は困った。

「パワーといっても、使い方はよく判らへんし」
すると柊が、

「いや、炎君は正しい。現に萌黄さんは徒手空拳で敵を撃退したのでしょうか？ きつと私たちも訓練すればできるのでしょうか。……などと言いつつ、自分の起こした地震さえ自覚なしですから、当てになりませんね」

一同は笑った。

その直後、部屋に迷彩服たちがバラバラと入ってきた。副長らしい男が口を開いた。

「これより指示に従って移動していただく。リアルのかたがたは、エネ研に向かってくれ」

「エネ研？ わたしらは入ったらあかんのと違うの？」

迷彩服の中にシュウがいた。彼は萌黄の言葉に応えた。
「あそこの地下以外に、安全な場所がないんですよ」

萌黄はむんや久保田といっしょに、エネ研の地下十階に戻ってきた。他のリアルたちも連れ立って。

厳戒態勢ということで、上のフロアに昇ることは禁止された。

「つまらんのお。こんなやつたらパワーの見せどころがあらへんやないか。なあハジメ」

齋藤老人はぼやいたが、ハジメはフンと鼻を鳴らしただけだった。

午後八時。各々はあてがわれた部屋に入った。

萌黄はむんの部屋にいた。明日までいっしょに過ごすつもりだ。

炎少年の部屋には母親も担ぎ込まれた。最後の夜を親子水入らずでという配慮である。

雛田も「保護者だ」という言い分が聞き届けられ、同

じ階に部屋をもらった。

一同に訪れた夜は、とても長いものになった。

5

ドアがノックされた。病み上がりのむんに代わり、萌黄がドアスコップを覗くと、伊里江の上半身が映った。

「……重要なお話があります」

招じ入れられた伊里江は、立ったまま前置きもなく萌黄に問いかけた。

「……疑問に思いませんでしたか？」

「何を？」

「……真崎の言ったことですよ」

「？」

伊里江は珍しく苛立った表情を浮かべた。

「……兄のアジトを発見したという部分ですよ。連中が手に入れた情報は、兄のスナップ写真と『大津』ということだけです。たった数日でどうやって発見できたのでしょうか？ 大津市は縦に長く広いのですよ。北は近江舞子の辺りから南は信楽のそばまで。しかも兄が写真と同じ格好で外を歩いていたとも思えません」

「罨やったんでしょう？ ホンマにプラプラ歩いてたんかもよ」

伊里江は言葉に詰まった。どうやら想定外だったようだ。

「……それはそれとしてですね。私は真崎たちがあやふやな手掛かりだけで出動したとは思えなかったのですよ。だから私は直接、質問をぶつけてみました」

「まさか迷彩服に？」

「いえ、彼らに訊ねても無視されるでしょう。質問した相手はエネ研スタッフです」

ああと萌黄は理解した。夕方のパーティーでスタッフ相手に、食い下がるように話し込んでいた伊里江の姿を思い出したのだ。

「……ストレートに訊かず、さりげなく遠回しにカマをかけてみました。知ってるんですよ、という感じで」

伊里江にしては上出来である。真崎にしてやられた経験を生かしたのか。

「……スタッフのひとりがここだけの話だと打ち明けてくれました。それはリアル探知機なのだと」

「探知機？」

「……ええ、驚きです、そんなものがあつたとは。」

原理はいたって簡単です。リアルの身体は細胞レベルまで裏返したので、ある周波数の電波を受けると干渉を起こすのだそうです。これを利用してラジオを流すように電波を流し、磁場の乱れを探せば、リアルの居場所が

つきとめられるという寸法です」

「じゃあ、お兄さんがここに近づいても、探知機に見つかってしまうんやね」

「……ところがそう簡単にはいかないから厄介です。干渉で起きる磁場の乱れは非常に小さく、よほど接近してくれないとダメだとか。スタッフが言うには、真崎たちはおそらく探知機を搭載した車を走らせ、大津市全体にローラー作戦を展開したのではないかと」

途方もないスケールだ。萌黄は嘆息した。あんな広いエリアを駆け回ったとは。真崎の執念が見えるようだ。

「……我々が地下に押し込められた理由のひとつは探知機のせいで、表を出歩いていると我々が干渉を引き起こし、兄の接近がつかめないのだそうです」

萌黄は伊里江に椅子を勧めた。こうなると立ち話では済まない。

「エリーさんのお兄さんはどうするつもりなんやろ。高い塀に囲まれて、たくさんの警備員がいてて、しかも狙うリアルはこんな地下深くに幽閉されてる」

「……想像もつきません。兄には仲間も後ろ盾もないでしょうし」

伊里江はぶつぶつと独り言をつぶやきながら自分の部屋に帰っていった。

「こわいね」

萌黄とむんは顔を見合わせた。

午後九時。

清香は雛田の部屋でソファに腰かけていた。清香が眠れそうにないと言うので、お茶でも飲もうと雛田が声をかけたのだ。

雛田はテレビをつけた。テレビはニュースばかり放送していた。今やまともに機能している放送局はNHKぐらいで、世界の至るところで発生するヴァーチャル関連の事件を刻々と報道していた。キャスターが述べたところによると、今日までで世界の総人口の三分の一が砂になったようだと言っていた。

「おじさまは、これからどうするの？」

「僕かい？ ……いや何も考えてない」

「お父さんの会社を継ぐんでしょ？」

「経営の才能なんてからっきしないからなあ。それにしばらくは芸能人もお呼びじゃないだろうし」

雛田はテレビに目をやった。大雨による土砂崩れの現場が映っている。数軒の家が飲み込まれたという。おそらく助けに来る者はいないだろう。砂の中から服を着た砂が出てくるだけだから。

「おじさま、何かわたしに話したいことがあるんじゃない？」

雛田はたちまち呼吸困難に陥った。つとめて平静さを装い、コップの水を飲んだものの、不自然さは覆いようもない。

「もしかして、お父さんのこと？」

ブフォツと水を吹く。まるでコメディアンの芸そのものだ。清香はわけの判らぬまま笑った。

しかしすぐしんみりした表情になると、

「やっぱりそうなのね……。お父さんは、他にもわたしのことを何か言ってたんでしょ？」

6

清香はティーカップを持ち上げた。雛田はそれを見て無意識につぶやいた。

「左利きになってる……」

清香は、ん？ と顔を上げると、

「わたしから見れば、おじさまこそ左利きよ」

「右利きだよ」

「判ってる」

「清香は、向こうに戻ったらどうする？」

「うーん、ひとまず心配かけたお父さんとお母さんに会いにいかなくちゃ」

「そうだな」

「でも、わたしがいなくなったことに気づいてないかな。だってしばらくオフの予定だったし、あのスタジオにも気まぐれでふらりと行ったんだから」

「気づいてないなんてこと……あるのかい？」

「それなら、『ちよつと旅行で留守してました』で済むわね」

「どうだろう。ほら、あの太鼓腹の助教授が説明してたじゃないか。向こうの世界はこっちがどうなってるのか、様子を知らることができないからきつと大騒ぎしてるだろうって。だから戻った時、君は貴重な証人として、盛大な拍手で迎えられるはずだよ」

「なんだかコンサートの時みたい」

雛田は額を叩いた。

「こりゃ失礼。清香ちゃんにとっては日常のことだな」
ハハハと笑った。だが清香は真剣な顔を雛田に寄せ、
「そろそろ話してくれてもいいんじゃない？ 何を隠してるの？」

じーっと視線が迫ってくる。雛田は進退窮まった。

（いや今こそ言おう。言ってしまおう！）

「あのさ——」

いいかけた、まさにその時。

ズウウウウウウウウウンン。

部屋を大きな横揺れが襲った。

雛田はバランスを崩して床に倒れた。だが清香の悲鳴を聞きつけ、急いで起き上がると、彼女のそばへと這っていた。

フツと電灯が消えた。部屋の中が暗闇に沈んだ。

それでも雛田はなんとかソファまで手探りでたどりついた。

揺れはやがて尻すぼみに小さくなっていくと、何ごともなかったようにスーッと治まった。電灯の明かりもすぐについた。

「……なんだよ、こんな時に地震なんて」

雛田は天井を見上げ、部屋の中を見回した。花瓶や電灯などの調度品は置いてないので、床に落ちたりしたものはなかった。

ホツと肩を降ろす。その頬を、何か柔らかいものが強烈な力でひっぱっていた。

「イテッ」

反射的に顔を庇おうと手を浮かした時、

「ふふわーっ」

清香が真っ赤な顔で雛田の前に浮上してきた。

「お、おじさま、ひどい！ 息ができないじゃない！」

雛田は無我夢中で清香に駆け寄ったものの、両手にクッションを持って、清香の頭を強く押しつけていたのである。

「ワルイワルイ。家にいるときのくせで、ダンスの上から物が落ちてくるといけないので……つい……」

ピンポンパンと音が鳴った。するとテレビが野宮助教授の顔を映し出した。

《地下十階の皆さんは無事かね？ とくにヴァーチャルのかたがた。お怪我のなかったことを祈る。私は今からそちらに伺いますので、よろしく》

午後九時二十分。

野宮がエレベータ口に現れた時、リアルたちは皆、廊下で待機していた。

野宮は三人の若い部下を連れていた。彼らは各々肩から見たこともない機械をぶらされていた。

「えー、ちよつと皆さんの身体の状態を測らせてもらおうと思いますので、どうかご協力願いたい」

「測るやて？」 齋藤が首をひねる。そして手首の腕輪を上げると、「コイツをしとるのに、わざわざ測る必要があるんかいな？」

「停電のせいです。ここの研究設備はたいがい別電源なのですが、腕輪からのデータを受ける装置がたまたま通常の壁電源だったもんで、処理用の機器ごとハンダアツプしてしまいましたな」

「わしに機械の話をされてもチンプンカンプンや」

野宮はこれはどうもと頭を下げ、

「先ほどの地震の震源地が、またココだったのです。おそらくは柊さんが震源だとは思いますが、念のため」

言いつつ、三人の部下を振り向くと、

「山上、山中、山下、すぐに始めてくれ」

白衣を着た三人は、それぞれ計測器から伸びた聴診器のようなものを片手で持ち上げた。見ていると三人とも同じ人間に聴診器をあてようとしている。

「コラ、リアルは清香クンだけじゃないだろ、バカもんが！」

結果はすぐに出た。なんと震源は萌黄だった。

それを聞いて、一番驚いたのは萌黄自身だった。

「びっくりすることはなからう。君はこれまでに地面を揺らしてことがあるはず」

野宮が他人事のように言うと、

「違うんです」

即座に萌黄は否定した。

「何が違うんだね？」

「だってわたし……起こそうと思って、地震を起こしたんです」

「君が、自発的・意識的・意図的に、わざわざ起こそう
と思つて地震を発生させたと、こう言うのかね」

野宮が念を押すように訊ねた。

「そやからそない言うてますやん」

返事したのはビッグジョーク齋藤だった。

「アナタには聞いてません」

野宮は老人をあしらうと萌黄に近づいた。

だが野宮の前に炎少年が車椅子を軋ませて割り込んだ。

『萌黄姉さん、とうとうできるようになったんだね！

スゴいなあ。ねえねえ、どうやったの？』

好奇心丸出しで嬌声をあげる。それでもサングラスの
顔はピクリとも動かない。声だけが上気している。

「私も知りたいな」柊も漆黒の衣装をひるがえして目を
輝かせる。居室に入っても袈裟を脱がなかったらしい。

「そんな、どうやったかなんて——」

萌黄は戸惑った。

「待った、待った！」あわてて野宮が萌黄の前に立ち塞
がる。「君たち、とんでもないことを言うな。また地震
を起こされたら困るじゃないか」

『あ、そうか、アハハハハ』

炎は軽快に笑った。野宮はそんな少年を睨みながら、
「笑いごとではないぞ。転送装置はこの上にあるんだ。
さっきの地震こそ規模が小さかったので助かったが」

「それじゃ口で説明してくださいよ」

柊が提案した。皆もそうだそうだと頷く。

「え……説明ですか……」

萌黄はもじもじと身をくねらせた。明らかにしゃべったことを後悔している。

『教えてよ、ねえ』

炎が全員の心の声を代弁した。齋藤老人など、萌黄にかぶりつかんばかりにすり寄ってくる。

（まいったなあ）

萌黄は助けを求めるように目を泳がせた。その目があ
る顔に止まった瞬間、アツと叫んでいた。

萌黄の指がその顔を指す。全員が指の方角を向く。

雛田の顔がそこにあつた。

「え、僕？」

今度は雛田が萌黄以上の戸惑いを見せる。

「あのー、わたしがやった方法は……カゲヒナタの『電
話マン』を少し変えたんです」

言ってしまったって萌黄はうつむいた。

「電話……マン……ですか」

柊は知らないなあと思った。どうやらリアルな誰も、
知らないようだった。

『ならさ、そのおじさんにやってもらえばいいじゃない
い』

炎の屈託のない言葉に雛田はあわてた。

「ちよつと待ってよ、こんなところじゃできないよ」

腕を振って視線をかわそうとする。しかし今や全員の期待が彼に注がれていた。

許されそうにないと知ると、雛田はがつくりと肩を落とし、

「やってみます」

と答えた。

おーっと全員が拍手を送る。そして廊下は静まり返った。

「一度だけですよ」

雛田の念押しに、皆はウンウンと首を振る。

雛田は、顔をはさむ位置に両手を持っていき、片足立ちになった。

皆が息を飲む。

《アツ地震ですー、

ハイハイハイ、

地震ですー、

ホイホイホイ》

「……………」

地下十階の廊下は、再び静寂に包まれた。

齋藤老人がやおら咳払いした。そしてパチパチと拍手した。つられて皆も散発的な拍手を送った。

野宮助教授は、険しい顔で萌黄に問いかけた。

「コレ？」

「は……い、そうです。心の中で、床や壁が揺れている情景を思い浮かべながらやりました」

はーっと助教授はため息をついた。

終だけは片足を上げて試みようとしている。あわてて雛田は制止した。

「お坊さん、二枚目はやらないほうがいいです。大事なイメージを損ねますから」

「はあ」

野宮は、とりあえず嚴重注意を萌黄に与え、山上山中山下を引き連れて、上階へと帰っていった。

リアルたちも部屋に戻った。

「萌黄さん」

最後に雛田が声をかけた。萌黄はたまらなくなり、頭を膝につくほど曲げて詫びた。

「すみマセン、大事なギャグを勝手に使ったりして！」

「いや、謝らなくいいよ。それどころか、よく僕のギャグを覚えててくれたね。礼を言わせてください」

そう言って、萌黄に負けないぐらい深々と頭を下げた。

萌黄はどう答えていいか判らない。

雛田は自嘲気味に笑いながら頭を上げると、

「僕たちカゲヒナタって、伝説なんて言われても、つまりは過去の遺物でしょう？ だからうれしいんだ」

萌黄はもじもじするのを止めて雛田を見た。目の前にいる四十五歳の男性は、本当にうれしそうだった。

「君のような若い女性が覚えててくれたなんて」

じわりと目に涙を浮かべている。思わず萌黄は、そんな雛田の両手を握った。

「わたし、ホントのホントにファンなんです。カゲヒナタの漫才ネタは暗唱できるぐらい繰り返し見ました。わたしの中では無敵のコンビなんです。——さっきの雛田さんの手の伸び、足の上げ具合、往年の動きのまんまやないですか！ まだまだイケますよ。もう一度チャレンジしてみませんか？」

雛田は真っ赤な目を萌黄に注ぐ。

「もう一度って、影松は死んじゃったし——」

「このままやめてしまうのはもったいないですよ。きっと何かいい方法があるはずです！」

「方法が……」

うつろに壁を這う雛田の目に、あるモノが浮かんだ。

——ピンクのカバ。

「そうか、アイツがいた！ アイツを相棒に仕立てれば

……」

やがて笑みは顔全体に広がっていった。両手をパンと合わせ、何度も力強く頷く。

「これだ、これしかない！——萌黄さん、ありがとう。君は僕の救世主だ！」

8

萌黄は解放されると自分の部屋に飛び込み、ようやく人心地をつくことができた。

（なんでわたしが救世主なんよ。大事な建物を揺らして、危険に晒した張本人やっちゅーのに）

野宮は、萌黄のエネルギーがまた一日分減ったと告げた。地震を起こすことでエネルギーを発散したのだと。

重要な点は、萌黄が始めて自らの意思でエネルギーを発散をおこなったことである。その方法というか、動作がどんなものだったにせよ、これは画期的なことなのだと野宮は絶賛した。

学術的には価値があるのかもしれない。でも明日、元の世界に帰ってしまう萌黄には関係のない話だ。

「あ、自分の部屋に戻ってしもた。むんが待ってる」
ベッドに横になりかけた身体を起こそうとした時、携帯バイブが振動した。

「なんや、びつくりさせんといて」

ホログラフィ映像に浮き出したのはギドラだ。

《文句を言いたいのはこっちだよ。ちっともひとりつきりになってくれないから、出られなかったじゃないか》

三つの首の頬を膨らませて、ぷりぷり怒る。

「そやね、明日になったらアンタともお別れやしね」

《名残惜しいかい？》

「うん、……あれ、元の世界にもリアルなギドラは存在するんやつけ？」

《理屈ではそうだね。いるはずさ。左右逆になったボクが》

萌黄には左右の首の区別がつかないが。

「また旅に出る？」

《うん。でも昨日や今日だって、いろんな所に出かけてたんだよ》

「ふーん、それはそれは結構なご身分で」

《ほんの近場がメインだけどさ。それでちよつと面白い情報を仕入れたので教えてあげようかな、と》

「明日でもええ？ むんが待ってんねん」

《ボクはいいけど、気にならないかい？ 炎って少年のこと》

萌黄は上げかけた腰をゆつくりと降ろした。

《聞きたそうだね》

「聞きたい！」

萌黄は両目をぎゅつと閉じて叫んだ。ギドラも応えるように宙返りした。身体の金粉がキラキラと散らばった。《ボクも彼のことは以前から知っていた。植物状態の人間のインタフェース部分をP A Iが全面的に担うというのは、画期的なニュースだったからね。でもこれまでに一度も彼を訪問したことがなかった。今回は萌黄さんとのやりとりを聞いてとても興味深かったので、お邪魔することにしたのさ》

「そっか。炎君のコンピュータもネットに接続してるから、アンタも忍び込めたんやね」

《忍び込むって言いかたは抵抗あるけど、まあそういうことかな。

彼は——炎君のP A Iはその性質上、一切表舞台に出ることはないから、特定のキャラクタを持っていないんだよ。判るね？》

「姿形を見せるための“絵”はない——」

《その通り。ソフトだけの存在。そんな彼に与えられたコードネームは“ファイア”》

「まんまやなあ」

《ボクね、最初は疑ってたんだ。P A Iが少年君と外界のやりとりを仲介してるなんてウソっぱじゃないかと。もしかしたらP A Iは、思考すらできない少年君になり

すまして会話を捏造し、車椅子の動きさえも勝手にコントロールしてるんじゃないかとね》

萌黄は絶句した。そんなことは小指の先ほども想像していなかった。確かに物わकारいの良過ぎる子だなとは思っていたが。

《でも訪問して疑念は消えたよ。少年君は確かに意識を持っていた。そしてちゃんとP A Iに向かつて、自分の意思を発していたんだ》

「よかった」

萌黄はホツと肩の力を抜いた。

《ボクはファイアの仕事ぶりを見て感動しちゃったよ。

少年君の脳髓からダイレクトに送られてくるさまざまな思念を、物の見事に処理してるんだもの。例えて言うなら、何人ものカメラマンがてんで勝手に撮影したフィルムを一本にまとめるようなものさ》

「へえー」

《とても人間業じゃない……って人間じゃないけど》

「人間の思念って、そんなにバラバラなん？」

《会話になる前だからね。感情がそのまま出るんだ》

萌黄は口を尖らせて天井を仰ぐ。

「よお判らんなあ。ウワーツとかヒョエーツとか、そんなが飛び交ってる感じかな」

《違うなあ。会話になる前であって、言葉になる前じゃ

ないからね》

「えーっ！　もしかすると、わたしが聞いても理解できる言葉なん？」

《まあね》

「聞いてみたい気がする」

《へへっ》ギドラは妙な含み笑いをした。《お土産代わりに、少しだけ録音してきた》

「げっ……趣味ワル」

《じゃあ消すよ》

「意地悪。ここまで来たら聞くしかないやん」

《ほい、それでは再生スタート！》

「——んじやねえヨ。——テめエ——ろされたイのか！
——イい加減二——目障りダ、出テ——」

9

萌黄は、受信状態の悪いラジオを連想した。しかし流れ出した音声は萌黄の思考を完全に麻痺させた。

「——くナよ。うざっ——けだぜ。これ以ジヨ——」

「ストップ！」

萌黄は叫んだ。再生が止まった。ギドゥは平然とした顔で宇宙空間を漂っている。

《確かに聴き取りにくい部分はあるけど、なんとなく判るよね。これはまだ出だし部分。この後はノイズもだいぶ減って聴き取りやすくなるよ》

ギドゥは勝手に再生をリスタートした。

「——だいたい（ドリンク、マズッ）が——ついて来なくても（狭い部屋！（息苦——い）——俺に指図——（クソ）なよな——（萌黄って女（チビ）は——）」

萌黄は布団を持ち上げると携帯を放り込んだ。しばらくモグモグと音声が続けていたが、やがて静かになった。

（ウソやろ？）

布団にまたがった萌黄は、冷や水を頭から被ったような気持ちがしていた。目だけが、あっちの壁こっちの壁と往來を繰り返す。

それはわずか二、三分のことだったろう。スーハーと深呼吸をすると、布団を持ち上げ、携帯に向かってドスの利いた声をぶつけた。

「アンタ、ええ加減にしいや！」

ギドゥは目をパチクリさせた。萌黄はさらに怒りを募らせた。

「わざとやっただけでしょう！ わたしにイヤな思いさせてどないするつもり！」

《ま、待ってよー》

ギドラはしょぼんと三本の首を垂れ、申し訳なさそうな声を上げた。

《聞きたいって言ったから聞かせたんじゃないか。怒るなんてあんまりだよ》

「今のは何？」

《だからあれが少年君の本当の声なんだって》

「ウソ、絶対ウソや！」

《ボクの説明を聞いて。あのね、ファイアはお母さんも言ってたように、少年君の自分の口では表に出せない心の声を外に伝えるのが役目なんだよね。ところが心の声というのは、聞いてもらったようにじつに混沌としているんだ。同時多発的に出現したり途中で切れたり。きつと最初の頃はファイアも苦労したんだと思う。自然な会話になるまでにかかなり学習を重ねた形跡があるから》

「……………」

《ボクが任されたら、きつとストレートに翻訳してしまうよ。するとどうなると思う？ 好ましいコミュニケーションが生まれるだろうか？》

萌黄は布団の上に両足を乗せたまま、背中を壁に押しつけた。ギドラが次に何を言うのか、彼女には読めるよ

うな気がした。

《犯人は、お母さんだ》

「犯人——」

《ファイアの過去ログをざっと見たんだけど、アクセスしてるのはお母さんのIDばかりだった。教育係は彼女さ。少年君に一番近い存在なんだから、彼の意思を翻訳するには最も適格と言え言える。けれど知らず知らずにお母さんの『こんな子でいてほしい』という願望が強く介入したんだろうね。結果、少年君はお母さんの理想の息子に仕立て上げられていくことになった》

「それは、もう炎君やない……」

《とも言い切れないさ。極めて意識いや脚色されてるとはいえ、元の意思を反映しているのは間違いないからね。『出て行け!』が『ちよつとひとりにしてくれるかな』になるように》

居室の中は、集中管理された空調が適温を保っている。しかし萌黄は寒気を感じた。こんな話は聞くんじゃなかったと激しい後悔が波のように押し寄せる。

《少年君の心は今や憎しみに満ちあふれている。ファイアとお母さんに対する憎しみが日々増幅しているようにボクには思えたね》

「アカンよ、アカン、そんなカワイソ過ぎる!」萌黄は足をバタつかせて抗議した。「炎君はお母さんのお人

形になってるやん。ヒドいわ」

《親子の間のことだから、口をはさむわけにはいかないしねえ》

「どっちも不幸やよ。わたし、許せへん！」

すると一瞬、ギドラの口が笑ったように見えた。

《待ってたよ、その言葉》

「え——？」

《ボクはね、自分の分身を少年君のコンピュータに置いてきた。一声合図すればそれが起動して、ファイアの初期化ルーチンを作動させることができる。それっ！》

ギドラが空中に向けて半重力光線を放った。光線は真っ直ぐドアのほうへと伸びていった。

《よし、これでOK》

「もしかして、初期化——したん？」

《ウン》

「お母さんや炎君に許可も得やんと、そんな」

ドンツと廊下で音がした。人の喚くような声が続く。

萌黄は携帯を布団の上に放り出すと、床に降り立ち、急いでドアを開けた。

萌黄は廊下に飛び出すと、声のする方向に素早く顔を

向けた。

一部屋おいて、その向こうが駿河親子の居室である。今そのドアは開いており、転がり出たらしい母親が、廊下の向かい側で床に肘をついている。

萌黄の耳はまるで気圧の変化でおかしくなったように何も聞こえなかった。

彼女は急いで母親に近寄った。母親は部屋の入口から目を離さず、口から泡を吹きながらひたすら何ごとか訴えていた。

入口のドアは全開になっている。車椅子に乗った炎少年がドアのそばに佇^{たたず}んでいたからだ。

少年は前に出てきた。車椅子の部品が引っかかりそうになると、両腕外側のアームパイプから、なんとマジックハンドがするすると伸びだし、器用にドアノブをつかんだ。

少年の声もスピーカーから流れてくる。詰まったような萌黄の耳にはその内容がうまく聴き取れないが、その声はギドラに聞いた声とそっくりだった。

萌黄の足に母親がすがりついてきた。母親の顔は涙や鼻水でぐしゃぐしゃになっていた。彼女は萌黄を盾に、鬼のような形相で、依然息子に言葉を浴びせ続けている。

車椅子が廊下に出てきた。さらに接近するにつれて、マジックハンドが前に伸びてきた。蛇腹になった関節が

伸び、金属の腕が、それ自体生き物のように迫ってくる。
萌黄は二本のマジックハンドを両手でつかんだ。

「もうやめなさい。やめないと折るよ」

おそらくドアの開閉やボタンを押す程度の用しか果たせないだろう弱々しいその金属アームは、萌黄に握られると動きを封じられ、車椅子自体も身動きができなくなつた。

「萌黄さん！」

「萌黄さん！」

柊や久保田の声が萌黄の耳を正常に戻した。異変に気づいて部屋を飛び出してきたのだ。

久保田は車椅子を後ろから萌黄から引き剥がし、強引に部屋の中へ連れ戻した。

柊は伊里江の手を借りて、母親を立たせたものの、彼女が息子の部屋に入ることを拒んだので、やむなく空いている別室に担ぎ込んだ。

萌黄は気がつくと自分の部屋のベッドの上に横たわっていた。そばにむんと清香がいる。

「あれ、わたし、どないしたんやろ」

「気がついた？」むんが萌黄の顔を覗き込んだ。「歯を食いしばって仁王立ちしたまんま、ウンともスンとも言わへんし——。しょうがないから清香さんにも手伝ってもらて担いできたんよ」

「――すみません」

萌黄は清香に頭を下げた。

「わたしには？」

「むんは身内やん」

「あれまっ。骨折り損」

むんは笑った。

「炎君の様子はどう？」

「久保田さんがついてるから大丈夫でしょ。それにしても炎君どうしたんやろ。突然、暴走したみたい」

「さあ」

萌黄はひとまず黙っておくことにした。

清香が頃合いを見計らったように立ち上がった。

「じゃ、わたしはこれで」

「あ、どうもー」

清香は名残惜しげに部屋を後にした。

萌黄が挙げた右手には包帯が巻かれていた。

「マジックハンドで手を切ったみたいよ。大したことはなさそうやけど」

萌黄は白い包帯をじっと見つめて、

「ねえ、むん、覚えてる？ 小さい頃わたしが右手を怪我したこと」

「忘れますかいな。小学校の体育館。忌まわしき鋼鉄の黒扉。あの扉、しばらくして撤去されたいよ」

「ホンマに？ 知らなかった」

「あの頃の萌黄は軽かった」

「むんはあの頃からもう背が高くてデカかったもんね」

「デカかったはよけいデス」

「泣きわめくわたしを保健室まで背負ってつてくれて」

萌黄は右手の甲を見た。その時の傷跡がある。

「萌黄だけと違うよ」

「何が？」

「思い出の傷跡。見る？」

むんは前髪をかきあげ、左のこめかみの辺りを指し示した。わずかだがスジ状の盛り上がりがある。

「萌黄を背負って体育館の階段を降りた時、最後の一段で踏み外したんよ。落ちてた石でザリツと」

「うわぁーっ。痛ソー」

「保健室に着いた時にはふたりとも血まみれ」

「それでどないしたん？」

「いっしょに並んで寝てたらカッコ悪いでしょ。だからわたしは絆創膏だけでもろて、むんのお母さんが来るまで平気な顔して座ってた」

「……ごめんなさい」

ワツハツハとむんは愉快そうに笑った。

「ずっと黙つてこうと思ってたんやけどね」

その夜、ふたりは寝るまで昔話にふけていた。

〈第十六章につづく〉